



増子孝義さん

東京農大生物産業学部教授



1951年、北海道生まれ。帯広畜産大学卒、同大学院畜産学研究科修了。東京農大短大農業科助手、同大生物産業学部助教授などを経て、1999年現職に。主な著書に、乳牛栄養学の基礎と応用（共著）デーリィ・ジャパン社、新版 特用畜産ハンドブック（共著）社団法人 畜産技術協会など

エゾシカに学ぶ環境共生 地域資源として有効利用

北海道全域に生息するエゾシカは52万頭と言われている。春の訪れとともに、その行動は活発になる。近年、農作物被害は年間40億円に。道路にも現れて、思わぬ交通事故も増え続けている。

当然ながら、捕獲や有害駆除には限界がある。

「いや、むしろ貴重な地域資源、自然資源として、有効活用の道を。人間と共生するためには、発想の逆転が必要です。エゾシカから学ぶ環境共生と地域産業の連携を」

その唱える「エゾシカ学」の理念である。エゾシカの生態を学び、その飼育管理、食肉などの利用、加工、流通までを、一貫した教育プログラムとして体系化した。文科省の支援事業（現代GP）にも採択され、今春まで3年計画で展開してきた。

北海道・遠軽町生まれ。帯広畜産大学酪農学科、同大学院で学び、専門は家畜栄養学だ。主に乳牛の牧草飼料（サイレージ）に関する研究を深め、東京農大には、1989年のオホーツク・キャンパス（生物産業学部）創設時に招かれた。

当初、動物資源学の研究室に教員4人が配属された。専門が異なるため、共通の研究テーマとして取り組むことになったのが、エゾシカだった。

「結局、私だけが今なお追い続けることに。しつこい性格ですから」と笑う。

キャンパスのある網走から知床、阿寒などにかかる道東一帯は、とりわけ多くのエゾシカが多く生息する。その生態研究を手始めに、共生の方策を探った。

「かつてアイヌにとってエゾシカは貴重な食料源であり、明治初期の開拓使時代には輸出用の食肉缶詰が作られたという記録もある。欧米で野生鳥獣の肉は、ジビエ料理に珍重され、その需要があったからでしょう」

歴史に学ぶ。行政が動いたのは、2005年だった。道庁が設置した「エゾシカ有効活用検討委員会」に有力メンバーとして参画、有効活用のガイドラインを作った。駆除するだけでなく、越冬中のエゾシカを捕獲、肥育して解体加工をする道を開いた。

すでに道東を中心に7ヶ所の「エゾシカ牧場」が誕生した。現在の飼育総数は約3000頭。繁殖はしないから「一時養鹿（ようろく）事業」と呼ぶ。地域経済低迷に苦しむ建設業者が、牧場経営に活路を求めて進出している。

皮はなめして、眼鏡や液晶画面などを拭くセーム革として商品化された。さらに、肉を各種の冷凍食品に活用する計画も動き出した。

無論、なお克服すべき課題は少なくない。野生動物と人間はどう付き合っていくべきか。人一倍の「しつこさ」で、いや、労を惜しまぬ情熱で、なお難題に挑み続ける。

（文・秋岡伸彦、写真・廣谷淳一）



エゾシカ学のロゴマーク